

# 古墳の他界観

The Concept of the Other World in Kofun

## 和田晴吾

WADA Seigo

はじめに

①古墳の築造と埋葬の手順

②宗教的側面における古墳の二つの性格

③古墳と船

④他界と横穴式石室

おわりに

### 【論文要旨】

古墳での人の行為を復元し、遺構や遺物を検討することで、前・中期の古墳を、遺体を密封する墓としての性格と、「他界の擬えもの」としての性格の、二つの面から捉えようと試みた。

この段階では、人は死ぬと魂は船に乗って他界へと赴くとされたが、遺体は棺・槨内に密封され、そのなかで生前のような生活を送るとは考えられなかった。奈良県東山古墳で発見された船は、実際の葬送の折に、魂が他界へと旅立つ様子を現実の世界で再現するためのものだった。

他界の内容は、船に乗って他界へと至った死者の魂は、くびれ部の出入口で船を降り(船形埴輪)、襪をし(罎形埴輪)、斜面を登った岩山の頂上の防壁堅固で威儀を正した居館に棲むが、そこは飲食物に満ち、日々新たな食物が供えられるといったものだった。葺石や埴輪や食物形土製品は他界を演出するための舞台装置や道具立てで、中期中・後葉には、これに人物・動物埴輪が加わった。

しかし、横穴式石室が採用されると地域差が顕在化する。後期に石室が普及した畿内では、石室は「閉ざされた棺」を納める「閉ざされた石室」で、遺体は、前代同様、棺内に密封され、玄室内は死者の空間とはならなかった。墳丘に人が登らなくなり、舞台装置や道具立ては形骸化ししたが、古墳は「他界の擬えもの」として存続し、石室は「槨」的な性格を受けついだ。

一方、中期に石室が採用されだす九州北・中部では、石室は「開かれた棺」を備える「開かれた石室」で、そこは死者が生前と同じような生活が続ける空間となった。その場合、家形埴輪とは別に死者の棲む家が用意されるが、玄室の天井が天空を表しそのなかに家形の施設を配する場合と、玄室空間そのものを死者の宿る家とする場合とがあった。『古事記』の黄泉国訪問譚の舞台は前者にあたる。ここでは、墳丘上の他界と、石室内部の他界の、二つの性格の異なる他界が入れ子状態で共存した。このような棺や石室の系譜は、中国の北朝や高句麗の一部に求めることができる。

【キーワード】 古墳, 他界, 船, 竪穴式石槨, 横穴式石室, 黄泉国訪問譚